

13) シャガ=射干/著莪/菁莪

シャガはアヤメ科の多年草で、日本各地の山林中に自生する。日本に分布するアヤメ科の中では唯一常緑種で、高さは30~60cmになり、葉は長さ20~40cm、幅3~4cmの剣状で光沢があり、2列に互生する。4~5月ごろアヤメ科の中では最も早く開花し、茎30~60cmの上方に花径5cmほどの花を数個つけ順次開花する。花被片は6枚あって白色から淡紫色、外花被片の中央部には橙黄色の斑点がある。しかし一日花で翌日には萎れてしまう。和名の由来はヒオウギの漢名『射干』からとったもので、別称としてオカダチカッコ、シャガバナ、ニンギョウグサなどがある。学名は『*Iris japonica*』で、種小辞は日本のという意味である。しかし後述するように日本の原産種ではないと考えられている。イギリスでの呼称は『finged iris』または『putchock』。中国では『蝴蝶花』である。

シャガはかなり古い時代に中国から渡来したものと思われ、日本での自生地は人里に近いやや湿ったところで、薄暗い杉林の中や竹林などに群生することも少なくない。またシャガは3倍体のために種子ができず、自生地は人為的に移植されたものか、栽培されていたものが、地下茎で自然繁殖したものと考えられている。

さて植物の3倍体の話である。通常の植物は2倍体で遺伝に必要な染色体を2組ずつ持っており、これが生殖に際しては♂の1組と♀の1組が交配され、遺伝情報の伝達が行なわれる仕組みになっている。これに対して3倍体ではこの情報のやり取りがうまく行かず、種子ができないのである。3倍体は何かの変異で4倍体の植物が発生し、これと2倍体の通常の遺伝子を持ったものが交配されたときに発生する。自然界ではシャガの他ヒガンバナやスイセンなどがあり、これを人為的行なったものが種無しスイカなどの種無し種である。4倍体の植物を作り出すためにはユリ科のコルチカム(05-01-11 参照)から取り出したコルヒチンを用いて行なわれている。

シャガの伝来時期は定かではない。もともとヒオウギ(04-01-15 参照)と混同されていたようで、平安時代の918年頃に記された『本草和名』には、「加良須阿布岐」(カラスアフギ)とあり、これがシャガとする説があるもののヒオウギかシャガか、これも定かではない。1661年に水野元勝によって著された『花壇綱目』には、斑入りのシャガが取り上げられている。しかしこの時代になってもヒオウギを射干とする文献もあり、混乱が続いた。このため俳句の世界では『著莪』の文字を当てている。

シャガの葉は裏と表がはっきりしない。葉の表は表同士が合着して二つ折りした形状になっており、見えているのは常に裏面である。このような葉を専門的には『単面葉』と言い、シャガに限らずアヤメ科のものはほとんどが単面葉になっている。ネギなども同様で、ネギの場合は葉が円筒形になっている。

シャガは花が美しいために16世紀にはヨーロッパにも伝わったが、日本ではもっぱら野の花として親しまれ、園芸品として品種改良される事はなかった。



シャガは通常3倍体で種子ができない(東京都八王子市)。



都内港区芝公園内に咲いていたシャガの花。都心部でもしばしば目にすることが出来る。



薄暗い木陰の奥でひっそりと咲くシャガは、とかく見過ごされてしまう花だが、種子で殖えることはなく長い年月を費やして、匍匐根を少しずつ伸ばして繁殖してきた(百草園)。



シャガは関東地方には自生地が多く、低山帯のどこでも見ることが出来る。 [目次に戻る](#)